

かねは雄弁に語りき

—石川県立美術館の金属コレクション—



蓮田修吾郎〈白銅浮彫「豊穡なるライン」〉
—企画展「かねは雄弁に語りき—石川県立美術館の金属コレクション—」より—

■ 特別陳列 メイジ・スタイル —石川から世界へ— 【近現代工芸】

■ 婚礼調度と遊戯具 【前田育徳会尊經閣文庫分館】

■ 千代女と加賀の俳人たち 【古美術】

■ 書にみる文字の造形 【近現代書】

■ 優品選 【近現代絵画・彫刻】

- 〔展覧会回顧〕 加賀宝生のすべて
- 学芸室の人々
- 1月の行事予定
- アラカルト ただいま展示中

新年のご挨拶

館長 青柳 正規

学芸員の眼

二種類以上の金属を混合したものを合金といい、混合率によって色や強度など様々な性質をもたせることができます。多種の金属・合金を用いたいるどり豊かな作品が生まれたのは、日本における大きな特徴です。工芸では、銅に錫すずなどを加えた青銅、黄金色の真鍮しんちゆう、烏の濡れ羽色と表現される黒色の赤銅しやくどう、銅と銀を混合することで灰緑色を呈する臙銀おぼろぎんなど、バラエティ豊かです。茶道具の釜は鉄でつくられ、銅鑼どうらは砂張製さばり。響銅きやうどうとも呼ばれる合金でよい音色を実現します。彫刻では、アルミニウムやステンレスなど戦後に新素材といわれた金属もみられます。それらが彫りや象嵌、溶接加工などでさらに彩られていくこととなります。



《鉄打出冠香炉 銘加呂住明珍紀宗幸同岳徳前練淨相味作》

令和5年を迎えて心から願うことは、コロナ・ウィルス蔓延の終結、そしてウクライナとロシアの間で休戦条約が締結することです。どちらもすぐに実現するとは思えませんが、粘り強く願いつつ、実現につながるのであればどんな些細なことでも努力を惜しまないようになりたいと思いますので。年明けの話題としてふさわしくはありませんが、まずこの二つの負の状態を克服しないと本当の明るい状況にはならないような気がします。

令和元年暮れから世界の状況が大きく変化したことは間違いない、まさにアントニオ・グテレス国連事務総長の「第二次世界大戦以来、最大の試練」にあるだけではなく、ロシアによるウクライナ侵攻が加わりより悪化しているとさえ言えます。しかし、そんな状況にあるからこそ私たちは日々の生活を平穏に送れるその幸せを噛みしめ大事にしたいと思えますし、この一年をより充実した思い出し

たいと念じます。そのためには私たちの祖先や先輩たちが生み出したさまざまな文化に触れ、時代の移り変わりを今一度思い描くのもいいのではないのでしょうか。お寺や神社を巡り歩いたり、和歌や俳句に歌われた名所をおとづれたり、昔からの名湯につかったりするだけでなく、今住んでいる町の夏祭りや秋祭りに行ってみたり、いつももなく呼ばれるようになった通りの名前の由来を考えてみたりするのも面白いと思います。

思い出をつくる、由来を考える、以前の出来事や人々を想い浮かべるといってごく身近なことから、地域の神社仏閣や史跡名称をおとづれたり博物館や美術館に足を運んでみることも、今を幸せに生きていくことの確認になるのではないのでしょうか。当館がそんな場所の一つとしてお役に立つことができたいへん光栄です。

企画展(第7・8・9展示室)

かねは雄弁に語りき—石川県立美術館の金属コレクション—

主催/石川県立美術館 特別協力/北國新聞社

後援/NHK金沢放送局、MRO北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、HAB北陸朝日放送

1月4日(水)～2月5日(日) 会期中無休

当館コレクションの魅力を発信する事業として、

金属をテーマとした企画展を開催します。「金属」というテーマのもと、古美術から現代までの作品が一堂に会します。ふだんは時代や技法ごとに別々の展示室で紹介されている作品を同時に紹介する内容は、当館としては新たな試みとなります。冷たい、無機質などとイメージされることも多い金属ですが、実は色彩豊かで様々な表情をみせる素材であることを感じていただければ幸いです。

本展は、金属の魅力を紹介するとともに、コレクションの魅力をこれまでとは異なる視点から発信する機会となります。音や動画の展示、解説が読める電子ブックなどもお楽しみいただけるよう準備中です。当館の若手学芸員がジャンルを越えチームで企画し準備を進めてきました。ぜひご覧いただき、感想をお寄せいただければ幸いです。

■展覧会構成

- 第1章 用途と美
- 第2章 超絶のわざ
- 第3章 金属という表現

■観覧料

- 一般600円(500円) 大学生400円(300円)
- *高校生以下無料
- *2階コレクション展観覧料を含む
- *（ ）内は65歳以上の方および20名以上の団体料金
- *身体障がい者・精神障がい者保健福祉・療育手帳をお持ちの方、またはミライROIDをご提示の方および付き添いの方1名は観覧無料

■関連行事

- ◇ギャラリートーク
1月8日(日)13時30分～14時30分
*要観覧券 *申込不要

◇土曜講座「金工ことはじめ」

- 1月21日(土)13時30分～15時
- 担当…竹内唯(石川県立美術館学芸主任)
- 会場…石川県立美術館 講義室
- *聴講無料、申込不要

※感染症の状況により内容を変更する場合がございます。最新情報は公式ウェブサイトをご覧ください。



重田照雄《心意空間》



銅器会社《金銀象嵌牡丹唐草文蠟燭台》



初代宮崎寒雉《福寿海尾垂釜》

婚礼調度と遊戯具

12月17日(土)~2月5日(日) 会期中無休

前号では婚礼調度と遊戯具について、簡単にご説明いたしました。本稿では、加賀藩十三代藩主前田斉泰に嫁いだ溶姫の生涯について、ご紹介いたします。

溶姫は第十一代将軍・徳川家斉の二十一女で、文化十年(一八一三)三月二十七日江戸城本丸大奥にて誕生しました。母であるお美代の方(専光院)は、通算四十人を数える家斉の側室の中でも、特に寵愛を受けた人物です。

加賀藩前田家に嫁いだとはいえ、本郷の加賀藩邸(現在の東京大学本郷キャンパスにあたる)で暮らした溶姫が、金沢の地を訪れたのはわずか二度のみ。参勤交代の制度が緩和された文久三年(一八六三)と幕末の慶応四年(一八六八)のことでした。一度目は善光寺や糸魚川を経由する藩主の参勤交代と同様の

ルートで金沢入りしています。江戸生まれの溶姫にとって、初めての大陸行でした。二度目は倒幕の機運が高まる中、息子である十四代藩主慶寧の申し出があり下向しました。まさに朝敵となった徳川家の一族として、江戸を離れざるを得ない状況だったので、三月下旬に前田家の別邸である金谷御殿に入りますが、混乱の中にあり精神的疲労も大きかったのでしょうか、わずか二か月後の五月一日、金沢にて急逝しました。

江戸から明治へという大きな時代の変化とともにあった溶姫の生涯。その中でも穏やかな暮らしを営んでいたであろう面影を、華やかな婚礼調度から偲んでいただければと思います。



〔葵紋蒔絵調度品 厨子棚〕溶姫所用

特別陳列 メイジ・スタイル —石川から世界へ—

12月17日(土)~2月5日(日) 会期中無休

本展は、明治時代の石川県において、県内で制作された工芸品が輸出の主流になったことに着目しています。その中から①九谷庄三、②明治時代の石川県、③九谷陶器会社、④図案、⑤大垣昌訓、⑥銅器会社の六つを軸として作品を選びました。それぞれの立場から制作されたこの時代の工芸作品を、石川県における「メイジ・スタイル」と呼び、図案や作品を再考する試みとなっています。

具体的にそれぞれの作品をみていきます。①九谷庄三は、自身が奉公した小野窯、師事した粟生屋源右衛門の作品から、のちに輸出九谷の主流となる庄三の作品の流れを確認します。②明治時代の石川県では、殖産興業の動きに反応して設置された、工芸を保護育成する公的な機関と、工芸を国内外に販売する民間企業でつくられた作品を紹介しています。③九

谷陶器会社では、同会社で活躍した浅井一毫、竹内吟秋、須田菁華などの陶工の作品を紹介しています。④図案では、石川県の工芸家たちによる工芸図案研究会、「蓮池会」による『蓮池会考案図式』や、清水美山《色絵金彩花詰蓋物》とその図案などを紹介しています。⑤では、デザイナー兼経営者として手腕を発揮した大垣に注目し、自身の作による『蒔絵楼閣山水図木目硯箱』をはじめ、加賀蒔絵で用いられる伝統的なモチーフを新しい技法で表現した椀などを紹介しています。⑥銅器会社では、技巧に優れた銅器会社の象徴作品をはじめ、そこで活躍した初代山川孝次、八代水野源六の作品を紹介しています。

それぞれの視点からチョイスした、明治時代の工芸作品をお楽しみください。



清水美山《色絵金彩花詰蓋物》

書にみる文字の造形

12月17日(土)~2月5日(日) 会期中無休

書の世界では、古典を学び修練を積むことは、今なお重視され続けています。その一方で、表現分野としての書は、特に戦後の社会状況の変化に伴い、絵画、彫刻と肩を並べ、会場芸術として表現が大きく変換されました。現代的な書の在り方を追求した作品や、美術館の空間に合わせて大作なども展開されています。

例えば黒々とした墨痕が主張する重厚感、かすれた線に漂う静寂な趣、薄墨色の柔らかくにしむ情緒的な印象など、絵画とも通じ合う感覚があります。展示中の淡墨の大胆な使用で、現代書の新たな表現を確立した鈴木翠軒は、自身の著書『書人翠軒』(一九六一年)で、「私は二十余年前から月一度は欠かさないで、上野の博物館へ行って日本画の名作を好んで観

ている。私が淡墨をやり出した原因には、これらの絵から受けたものが多分にあると思う」と、造形的表現に開眼した昭和十六年頃の様子を語っています。

一九五十年代から六十年代の抽象芸術やシュルレアリスムに代表されるような、欧米の前衛芸術の影響のもと書の表現も拡大し、文字の約束事から離れた前衛書などの表現につながったともいえます。一方、欧米の画家や美術評論家も日本の書に関心を寄せ、また、日本からの海外美術展に出品する書家もいるなど、影響関係は相互的なものでした。

このように書の伝統の継承と新たな創造の織り成す中、書と絵画とは相互に関わり合いながら、その表現の可能性を徐々に広げていったのでした。



鈴木翠軒《行觴》

千代女と加賀の俳人たち

12月17日(土)~2月5日(日) 会期中無休

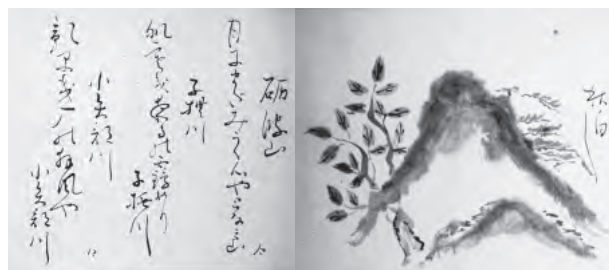
加賀の女性俳人といえは千代尼が有名ですが、前号で触れたもうひとりの女性俳人珈涼(一六九六~一七七二)について紹介しましょう。

珈涼は夫の坂尻屋八郎右衛門とともに和田希因という蕉門の俳人に学びました。寛延三年(一七五〇)の秋から冬にかけて、珈涼は百余日かけて越中国を行脚し、越後国に近い泊へ至ります。女性の一人旅といえは驚くかもしれませんが、それぞれの地で俳諧仲間と交流し、寺社や名所旧跡を訪ねた思い出を記したのが『越路の記―渡り鳥―』です。冒頭は、子から贈られた杖を頼りに、網代笠をかぶって歩いたことが始まります。「踏み分けて 露の蹴あけや わたり鳥」

夜るの鶴あり 子撫川」と詠み、続く小矢部川では「影早き 雁の羽風や 小矢部川」と、雁が飛ぶ寒々とした空を詠みます。旅路を詠み、描く。珈涼が意識したのは、芭蕉の『おくの細道』に他なりません。芭蕉の影響が北陸の地にまで広く影響を及ぼしていたことがうかがえます。

本特集では、もう一幅、珈涼の作品を紹介します。「菊炭に ながれもありて しぐれかな」です。句とともに、切り口が菊花のようになった炭が盛られて描かれています。時雨の降る冬の日、菊炭が流れるある菊水の模様のようにしていると詠んでいます。

芭蕉と千代尼、そして珈涼以外では、蒼虬・希因・麦水・蘭更・梅室・年風らの作品を紹介します。



《越路の記―渡り鳥―》坂尻屋珈涼

展覧会回顧

加賀宝生のすべて

—能面と能装束—

9月17日(土)～10月23日(日)

大正明治期に行われた売立うわたてによって散逸した能装束を中心に紹介した企画展『加賀宝生のすべて—能面と能装束—』は十月下旬に無事終了し、十一月の上旬まで拝借した作品の返却に関西・名古屋・東京と回っていました。振り返ると、所蔵先の美術館の方々とは長いお付き合いです。「前田家の能装束が、全国各地にある」と知ってから、約二十年。多くの方々のご理解とご協力を経て、「調査をし、その成果を文章にし、展覧会を開催する」という「学芸員の仕事」をようやく実現できました。

特に、明治時代に狩野芳崖が前田家で見て模写した能装束を、その画卷ともに展示するという第四章(第9展示室Ⅱ写真左)は、模写された能装束のうち、

現在の所蔵先を特定でき、かつ展示可能な能装束となるとかなり限られたため、作品の選定と調整には悩みました。所蔵先から無事出品のご内諾をいただいたのは、七月のこと。画卷とともに展示するという展示室のイメージが、ようやくできあがりしました。「これだけの展示は、石川県立美術館でははじめて」「美しいものばかり」という嬉しい感想を多くいただいた一方、どう使われるのか、というイメージが持てず残念というご意見も頂戴しました。舞台写真の使用には、能楽師の方の肖像権があり難しいこと、江戸時代の能装束の展示を主眼としたため、現在も使用できるか否かはまた別であることについて、ご理解いただければと思います。



第9展示室



第7展示室

近現代絵画・彫刻(第3・6展示室)

優品選

12月17日(土)～2月5日(日) 会期中無休

雪も降り始め、冬の到来を感じます。

雪がテーマの日本画分野から紹介するのは、北野恒富《鶯娘》です。現在でも歌舞伎の坂東玉三郎が演じて知られる同名の舞踊が本作のモチーフです。舞台では人間に恋をする鶯の化身の「情念」がみどころですが、恒富はそれを敢えて押し殺し、抑えた表現に徹しています。数えられるほどの雪が、一層その効果を上げているようです。

冬がテーマの油彩画分野からは、埜谷次郎《白い教会》を紹介します。ベルギー・ゲントにある、白く雪化粧した聖ミカエル教会を描きます。橋の向かい側に立つ人物に注目すると、こちらにカメラを向けています。彼の写真には、寒空の下デッサンをする埜谷が写っているのかもしれませんが。

同テーマの版画分野では、宮本三郎の『舞妓十二

題』の中の新春にふさわしい題材を展示しています。

この木版画は宮本の素描淡彩画の原画をもとに、当時の木版画界の最高レベルの彫師と摺師によって制作されたものです。季節ごとの行事に伴う衣装や髪型の変化や、何気ないしぐさの可憐な姿など、宮本の舞妓の作品群をお楽しみください。

彫刻分野では、石川県を代表する彫刻家である吉田三郎をはじめとした作家たちの男性像を集めてみました。吉田作品としては、今年没後百年となる科学者・高峰讓吉の肖像や、戦時期の世相を反映した騎馬像《偵察》などを展示します。そのほか、千鳥足の表現が秀逸な坂坦道《酔っぱらい》、石川県民おなじみの風習を力強く表現した《御陣乗太鼓》などをご紹介します。



北野恒富《鶯娘》

学芸室の人々

竹内 唯(普及課学芸主任)

古物屋ともいうのでしょうか、かつて使われていた生活用品を売っている店が好きです。家具や古着などを買い求めて、生活に取り入れています。「骨董」や「ヴィンテージ」までいくと、高級な感じになってきて手が出ませんが、そこは実際に使うのが目的。リーズナブルな、かつ状態のよいものを見つけて出したり直して使ったりするのが面白いです。最近では、古着のコートがさすがにへたつてきたので、お直しの店に頼み、裏地をサーモンピンクから深緑に全取り換えしました。数十年前のものたちを、これからも十年単位で使っていきたいです。

白山のクロユリ。
3年越しに会えました。

鈴木 彩可(普及課学芸員)

先日のバスツアーで的一幕。白山登山のお話をしていた際、とある会員の方が、「わたし禅定道から(白山に)登ったことあるのよ」とぼつり。わたしも毎年、夏になると白山へ登りますが、泊りがけの禅定道はレベルが高く、全く見向きもしていませんでした。しかし、一度話を聞くと気になってしまふもの。当時の修験者が歩いた道をたどり、信仰の歴史を物語る史跡や地名をめぐること、白山信仰への理解がより実感を持って深まることでしょう。今冬は、禅定道の地図を眺め、登山記録を読み…と焦がれる気持ちを募らせる日々となりそうです。

1月の行事予定

■美術館でかきぞめ	10時～11時30分	コレクション展示室受付付近
申込不要	所要時間約30分	※要コレクション展観覧料
4日(水)	干支や新春にふさわしい一文字を書いてみませんか。 申込不要で、どなたでもご参加可能です。お気軽にご参加ください！	
■寒糊炊き	9時30分～15時	文化財保存修復工房前 無料
21日(土)	毎年、大寒の時期に文化財修復に使う糊(接着剤)を仕込みます。作業の様子を申込不要でご自由にご覧いただけます。	
■土曜講座	13時30分～15時	美術館講義室 無料
21日(土)	「金工ことはじめ」	学芸主任 竹内 唯
28日(土)	「明治時代の九谷焼」	学芸主任 奈良竜一

ご参加にあたってのお願い

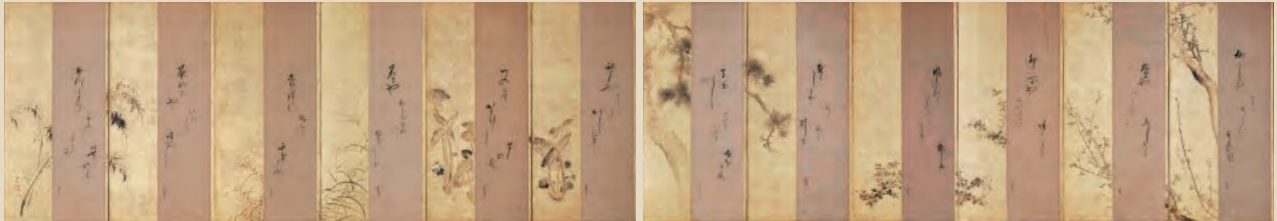
- ① 来館時にサーマルカメラによる体温チェックを行います。
発熱等体調に不安がある方の参加はご遠慮ください。
- ② マスクの着用、手指消毒の徹底をお願いします。
- ③ 参加時は受付名簿に氏名と連絡先をご記載ください。
- ④ 会場内では会話を極力ご遠慮ください。

《十二句貼交》じゅうにくはりませ

6曲1双 各縦117.2cm 横316.2cm
江戸 18世紀

千代尼 ちよに

元禄16年(1703)～安永4年(1775)



ここ近年、テレビでも俳句が人気です。五・七・五という限られた十七字の中に季節と心情を詠んだ俳句と、それにふさわしい絵画を添えた俳画が、江戸後期に流行しました。季節の変化に気づき、それを愛でる喜びは、今も昔も変わりありません。第二展示室で開催中の特集展示『千代女と加賀の俳人たち』で紹介する、四季を詠んだ千代尼の《十二句貼交屏風》の左隻の句をみてみましょう。

秋になり、北の空からはじめて渡る雁を「初雁」といい、それらは列をなして飛来します。そんな風情に満ちた光景を、一度にならべて聞くのは惜しいことだと詠んだのが、「初雁や ならべて聞ハ おしいこと」です。

空を飛ぶ鳥については、千鳥についても詠んでいます。「こぼれても 風ひろひ行 千鳥かな」群れから外れた千鳥がいたけれど、すぐ風に乗って、千鳥の群れに追いついている様子を詠んでいます。

可憐な花をつけている芦も、早春はまるで角である。それは怒りではなく、怒りをおさえるためだと詠んだのが、「つのぐむは おさゆるためぞ 芦の花」です。

「そつと来るものに 気付や 竹の雪」は、雪は音もなくそつと降るけれど、竹に積もるとすぐたわむので、雪にはすぐ気づくと詠んでいます。そして、この句の両脇には雪がつもりたわんだ竹が描かれるのです。

秋と冬を詠んだ四句を紹介しましたが、本屏風には四季を詠んだ句と梅や松などの植物が交互に描かれています。昔も今も、季節の移ろいに変化はありません。千代尼の句を味わいながら、俳画も楽しんでいただきたいと思います。

次回の展覧会

令和5年2月11日(土・祝)
～3月22日(水)
会期中無休

	前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
	《荏柄天神縁起絵巻》 と天神画像	大乘寺の文化財
第4展示室	第5展示室	第3・6展示室
音楽と舞 【近現代絵画・彫刻】	優品選 【近現代工芸】	優品選 【近現代絵画・彫刻】

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)
大学生 290円(230円)
高校生以下 無料
※()内は団体料金

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

1月の休館日は
1日(日)～3日(火)石川県立美術館だより
第471号(毎月発行)
2023年1月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>石川県立美術館は電源立地地域対策
交付金を活用して運営しています。

www.haiku-sen.com

オンライン俳句図書館に
句集を掲載しませんか

福江編集プロダクション TEL/FAX 0766-30-5585

広告